

海外メンタルヘルスの現場から II

(28) 駐在員と発達障害

シンガポール日本人会クリニック

医師 日暮 真由美

夫婦間のトラブルが原因で心身不調をきたし、心療内科を受診されるというケースは当院でもコンスタントにあります。症状としては、眠れない、胃が痛い、動悸がする等が多く、大抵、ご本人は体調不良の原因は夫婦問題のストレスであるとはっきりと表明されます。シンガポールに駐在してから夫婦間が上手くいかなかったというケースもありますが、シンガポールに来る前から夫婦仲があまり良くはなく、こちらに来てからさらに顕著になったというケースの方が多いかもしれません。

そういうケースの中で、配偶者のどちらか、時には双方共が発達障害的な特性を持っていると推測される場合がしばしばあります。つまりは、円滑なコミュニケーションや良好な対人関係を作ることが生まれつき苦手な性格が夫婦関係に大きく影響していることが判明するケースです。

近年では大人の発達障害という概念がずいぶん周知されてきているので、患者さんの方から「発達障害」という言葉が出てくることも多くなりました。たとえば、大体はご主人よりも奥様の方が心身不調で先に受診されるケースが多いのですが、「夫が異常に自分勝手」「人の気持ちがわからなさすぎる」などというところからネットなどで色々調べ、「うちの夫は大人の発達障害ではないか？」と思いつくようになるようです。奥様から話を聞くだけでは推測することしかできませんが、実際にご主人にも病院へ来てもらえるような場合では、ご主人の性格特性の評価ができます。ただもう奥様の捉え過ぎで、ご主人はやや個性的ながらも普通の人であることもありますが、どちらかと言うと奥様の予想通り、ご主人にはコミュニケーションの異常な苦手さがあることがわかり、軽度の発達障害やあるいは人格障害的な特性を見出せることも少なくありません。

時には、「『あなたは発達障害に違いないから病院へ行け』と妻に言われて来ました。」と、ご主人が初診されることもあります。こういうケースではすでに奥様が疲れ切っていることが多く、ご主人が病院へ行って性格、行動を何らかの形で改善しなければ離婚！などの最後通牒を奥様から突き付けられています。すったもんだの末にしろ、結局は妻の意向に沿って素直に受診され、「自分自身は発達障害だとは思わないけれど妻が行けと言うので、何か改善できればと思って受診しました。」とおっしゃるご主人。「今日の診察で言われたことを妻に報告しなければならぬ」と、必死に私の言葉をメモしている様子に、発達障害の疑

いを感じざるを得なかつたりします。

一般的には発達障害の人は社会適応が困難とされますが、一方、知能に問題のない発達障害の場合は生来の集中力の高さから高学歴である人も多いです。また、仕事の種類や内容によっては本人の特性が生かせ、むしろ普通の人よりも優れた業務成績をおさめる人も少なくありません。駐在員の方は優秀な人が抜擢されて来ますので、ひょっとしたら発達に特性のある人の割合が決して少ないのかもしれないとも思う今日この頃です。